

おわりに

この本を書いている最中、ある事件の判決が出た。

東京・練馬区でひきこもり男性が元農水事務次官の父親に殺された事件の判決だ。

父親は、息子が「人に危害を加えるかもしれない」と思い、殺害したと供述。また、裁判では自身が家庭内暴力を受けていたことも明らかとなった。判決は、懲役6年。が、高齢などを理由に数日後には釈放された。中学でいじめに遭い、長らくひきこもっていたという男性は殺害される数日前、「俺の人生なんだったんだ」と叫んだという。事件当時、男性は私と同じ44歳だった。

練馬の事件が起きた約1か月半後には、京都アニメーションで放火殺人事件が起き、35人が死亡した。逮捕されたのは41歳の男。職を転々としてきた男には、派遣切りや生活保護受給の経験だけでなく、過去にコンビニ強盗の前科もあった。

親によって命を奪われたロスジェネと、あまりにも多くの命を奪い去ったロスジェネの事件が立て続けに起きた2019年。

そんな2019年11月には、序章で書いた宝塚市の正社員採用の結果が出た。

もともと3人の募集だったところ、4人が合格したという。宝塚市のような氷河期世代を採用する取り組みは全国にも広がりつつあるらしく、愛知県や和歌山県、茨城県境町などでも採用試験を実施する動きがあるという（朝日新聞2019年11月27日）。

雇用の調整弁として時に社会の「犠牲」にされつつ、しかし「自己責任」となじられ続けてきたロスジェネ。ここにきてやっと同情を伴った注目が集まりつつあるが、本書で語ってきたように「手遅れ」となったことも多い。

「損をした」と思うことばかりだけど、自分たちの下の世代が安泰かと言えば、まったくそんなことはない。

不安定化が常態化した社会で、ロスジェネは自分たちのやり方で生き延びる方法を、幸せになる方法を模索していくしかない。

そして、それは確実に始まっていることが、本書を通して少しでも伝わればと思っている。そのうえ、それが次の世代の生きるヒントになれば、これほど嬉しいことはない。

スペシャルサンクス あけび書房のみなさま、倉橋耕平さん、貴戸理恵さん、木下光生さん、松本哉さん、装丁の森近恵子さん、この本を手にとってくださいましたあなた

2020年1月 雨宮処凛